

江別市立病院 大学と共同研究

札医大は遠隔診療、北大は呼吸器部門

【江別】江別市立病院は、札幌医大、北大との間で、遠隔診療のシステムや医療用機器の開発に関する共同研究を始めた。本年度から院内に研究を進めるための2部門を新設。両大学との連携を進め、地域医療の充実につなげる狙いがある。新設するのは、内視鏡を使った遠隔診療の仕組みの構築を目指す部門と、呼吸器系統の病気の早期発見を目指す部門。

研究を行う部門には、炎症性腸疾患（IBD）の国内研究の第一人者である札医大の仲瀬裕志教授らが参加。2026年3月までに内視鏡の遠隔診療の仕組みづくりを目指す。実現すれば消化器がんの早期発見や、住んでいる地域の病院で専門的な治療が受けられるようになる可能性がある。

IBD患者の診療にあたる部門の開設を記念して4月26日に同病院で開かれた講演会では、これまでの実例を交え、遠隔診療の可能性を説明。その上で「広大な北海道では医療連携が不可欠。市立病院が先頭となって道内医療の均一化を目指すそう」と、参加した職員ら約70人に呼びかけた。



部門開設を記念して開かれた講演会に登壇した仲瀬裕志教授＝4月26日

呼吸器系統の研究を手がける部門では北大と連携。市内の医療系企業や市立病院の健診センターとも協力して、新たな医療機器の開発を目指す。6月にも本格的な研究開発に着手する予定。参加する北大の今野哲教授は「産学官の連携を深め、病気の早期発見につながるのが目標」と語った。両大との研究には、市立

病院の経営改善に向けて20年7月～23年3月に市職員給与を削減して創設した「未来医療創造基金」の約1億3千万円を活用する。23年2月には江別市と当別町、空知管内南幌町、新篠津村で「江別・南空知先端医療推進協議会」（事務局・市立病院）を設立して、周辺医療機関とも連携する枠組みを整えた。

市立病院の長谷部直幸・病院事業管理者は「各共同研究は市立病院が目指している、最新技術を用いて患者に寄り添う『高度先進地域医療』の実現につながる」と期待した。

（土門寛治）